

佛蘭西書巡覧 1

平山 弓月

イラストレーションに対する最大の賛辞は購読者数にある。
今日、雑誌としては驚異的な18,000部と言う数を超えている。

Eugène HATIN, *Histoire du Journal en France*
1631-1853, Paris, P. JANNET 1853

フランスでは、19世紀にジャーナリズムが大きく発展し、多くの新聞が発刊されました。また産業技術の革新から大量印刷が可能になり、低価格の新聞も発行され、多くのフランス人の手にするところになっていました。それらの多くは、政治的思想的党派性をはっきりと示していました。そして新聞が政治的な変革に関わり、政変を主導しました。

そういった状況の中、1843年3月4日に、特定の一党派に偏することのない、フランス最初の挿絵入り新聞として「イラストレーション」*L'ILLUSTRATION, journal universel* が創刊されました。journal(主に「日刊紙」の意)を名乗っていましたが、実際は毎週土曜日に発行される「週刊誌」でした。紙面は大型四つ折判quarto(実測25,2cm×36,7cm)で、おおむね毎号20ページ建てで購読者の手に渡りました。1944年に最終号の5293号を出すまで、この形式は変わりませんでした。総ページで18万ページ、収録された図版は500万枚近くに及びました。図版は当初木版画でしたが、1891年にはフランスで初めてモノクロ写真を、そして1907年にはカラー写真を紙面に載せました。創刊後半年にして、創刊者の一人が「イラストレーションはあらゆる国の人々の暮しを映し出すものとなった」と書いたのも、紙面が文章だけでなく、豊富な図版が添えられ記事と一体をなしていたからでしょう。一例を挙げてみましょう。

1855年にナポレオン三世の治下、フランスは初めての万国博覧会をパリで開催しましたが、その折にもこの図版記事はその力をいかに発揮しています。博覧会のために建設された「産業宮」*Palais de l'industrie*の正面を飾る装飾彫刻も、また美術品展覧用にモンテーニュ街に開設されたギャラリーの平面図も、大型紙面一杯を使って報じられています。圧巻はこの展覧会に出品されたドラクロワE. Delacroix(1798 - 1863)の『キオス島の虐殺』*Le Massacre de Scio*などの四作品が、色彩こそありませんが、稠密な木版画で再現し掲載され、詳細にわたる解説が付されていることでしょう。会場に行かずとも、読者は楽しめたことでしょう。

一方で、1855年と言えばフランスはクリミア半島で、オスマン・トルコ帝国をイギリスなどと共に後押しし、ロシア帝国と戦争をしていました。いわゆるクリミア戦争です。イラストレーションは、万国博覧会と言う「祝祭」だけに眼を向けることはありませんでした。この戦場にも特派員を派遣し、またふんだんに図版を使って、克明にこの戦争の状況を、兵士たちを送り出したフランスの人々に伝えています。読者は臨場感を持ってクリミア戦争と言う「現実」を感じ取っていたはずです。

これなど、「文章で書かれた報告はたとえ最良のものであっても、事物そのものの再現にくらべると精彩を欠くし、生気がなく、つねに不完全で、理解しづらい」(小倉孝誠訳)と、創刊号巻頭の「われわれの目的」で高らかに宣言した、紙面づくりの方針を具現したものと言えるでしょう。

(今回から数回、主に本学付属図書館が収蔵するフランス語書籍から、興味深いものを順々に選び出し、内容を玩味しつつ紹介してゆきます。)

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)

